

マウドゥーディーのクルアーン注釈書
—— 南アジアにおける『クルアーンの理解』をめぐる ——

須永 恵美子*

Urdu Qur'anic Interpretation by Maulānā Maudūdī:
Tafhīm al-Qur'ān and its Impact in South Asia

SUNAGA Emiko

This paper is an analysis of the *tafsīr* (Qur'anic Interpretation) by Maulānā Saiyid Abū al-A'lā Maudūdī (1903-1979). A *tafsīr* is an interpretation/exegesis of the Muslim Holy book, the Qur'an. In the history of Islam, including South Asia, religious scholars and authors have tried to compose new *tafsīrs* across regions, languages, and ages. The Qur'an, regarded as the word of God, needed *tafsīr* for an obvious reason: it had to be understood clearly and fully so that its commandments could be carried out with the conviction that the will of God had been done. *Tafsīr* literature is the main resource not just as religious books but also as social literature to analyze the social thoughts of the age.

In this paper, Maudūdī's *tafsīr*, named *Tafhīm al-Qur'ān*, which was originally written in Urdu, will be analyzed. The origin of his *tafsīr* is based on his background, for he aspired to solve the problems of South Asian Muslims through the Islamic way. In addition, his eagerness was matched with the consciousness of South Asian Muslims. For this reason, *Tafhīm al-Qur'ān* is called the crystal of his religious thought. This study is a part of *tafsīr* study in South Asia.

I. はじめに

1. 本稿の目的

本稿の問題関心は、サイイド・アブルアラー・マウドゥーディー Saiyid Abū al-A'lā Maudūdī (1903-1979) の『クルアーンの理解 *Tafhīm al-Qur'ān*』が、南アジアにおけるタフスィールの伝統の中で、どのような位置づけにあったのかということである。まず、マウドゥーディーがどのような執筆意図を持ち、誰に対して語っていたのかを明らかにした上で、今後の展望につなげたい。

2. 南アジアにおけるタフスィールの伝統とウルドゥー語タフスィールの出現

南アジアで書かれた最古のタフスィールは、スィンドの神秘主義者マフドゥーム・ヌーフ *Makhdūm Nūh Hālā'*¹⁾ によるペルシア語のタフスィールと言われている [Khan 1996: 219]。ヌーフのタフスィールは、彼の死後 1606 年に弟子の手によって完成したが、その詳細については記録が少ない。18 世紀に入ると、イスラーム思想家シャー・ワリーウッラー *Shāh Walī Allāh al-Dihlavī*²⁾ が、タフスィール *Fath al-Rahmān* (1738) を執筆し、ワリーウッラーの長男シャー・アブドゥルアズィーズ *Shāh 'Abd al-'Azīz al-Dihlavī* (1749-1824) は *Fath al-'Azīz*³⁾ を著した。どちらもペルシア

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程、日本学術振興会特別研究員 (DC)

1) ?-1590。16 世紀に現バキスタン・スィンド州のハーラーで活動していた学者、神秘主義者。現在同地には彼の墓廟が祀られている。

2) 1703-1762。18 世紀を代表するデリー出身のイスラーム思想家、法学者、ハディース学者。

3) アズィーズのタフスィールは弟ラフイーウッディーン *Shāh Raḥī' al-Dīn al-Dihlavī* が 1789 年にウルドゥー語に翻

語で書かれており、現代に至るまで頻繁に引用されている [Khan 1996: 220]。

ペルシア語ではなく、南アジアの言語でタフスィールが執筆されるようになったのは、ムラードゥッラー・アンサーリーとワリーウッラーの息子たちによる功績が大きい。シャー・ムラードゥッラー・アンサーリー Shāh Murād Allāh Anṣārī は、1771 年にウルドゥー語による初のタフスィール *Khudā ki Ni'mat* を記し、1831 年にカルカッタから出版した。彼のタフスィールは、ジュズウ⁴⁾ 第 30 (至高者章から人びと章) のみを執筆した選択的タフスィールであったのに対し、シャー・ワリーウッラーの三男アブドゥルカーディル Shāh ‘Abd al-Qādir al-Dihlavī (1735–1815) の *Mūḍiḥ-i Qur’ān* は、通巻的タフスィールであった⁵⁾。アブドゥルカーディルは、父から教育を受け、タフスィールやハディース、法学を学んだ。その後 40 年間ほどデリーのアクバラーバード・モスクの部屋の中でズィクルをしながら過ごしていたため、兄たちのようなファトワーや書物を記す活動はほとんど行なっていなかった [Khan 1997: 34–35]。しかし、「ペルシア語はもはやインド hindustānī の普通の人々には理解できなくなっており、インド語 hindī zabān に翻訳する必要がある」という使命感から筆を取り、1791 年にウルドゥー語で最初の通巻的タフスィールを発表した [Khan 1997: 35]。最初はクルアーンの章句のみ翻訳したが、後に周囲の人々に懇願されて解説 fā'idah を加えた [Khan 1997: 36]。当時、デリーには印刷所がなく、またクルアーンの印刷を是としない風潮があったため、しばらくは弟子たちの間で手写されていたが、1829 年になって、カルカッタのフーグリにあるアフマディー・プレス Ahmadi Press 社から出版された [Khan 1997: 38]。

3. 南アジアのタフスィールの言語

南アジアにおけるタフスィールの伝統においては、ウルドゥー語が主要な役割を果たしてきた [Khan 1996: 211]。次の 2 つの表は、書誌学者ハーンによる南アジアのタフスィールの研究をもとに、各言語における現存する最古の印刷されたタフスィールを整理したものである。

表 1. 南アジア諸言語における印刷された最古の通巻的タフスィール

	言語名	出版年	著者名	出版地
1	ウルドゥー	1803	A Board of Translators	カルカッタ
2	バシュトー	1861	Anon.	ボーパール
3	スィンディー	1870	Azizullah Akhand Muta'allawī	グジャラート
4	パンジャープ	1871	Ḥāfīz Muḥammad bin Mawlānā Barikullāh	ラーホール
5	タミル	1873	Muṣṭafā ‘Ālim Ḥādjiyār, Nūḥ ‘Ālim Šāheb	ボンベイ
6	グジャラート	1878	‘Abd al-Qādir bin Luqman	ボンベイ
7	ベンガル	1879	Rajendranath Mitra	カルカッタ
8	バルーチ	1911	Ḥuḍūr Bakhsh Mawlānā	ラーホール
9	マラヤーラム	1912	Khadar Kutti	ポナニ
10	ヒンディー	1916	Dharmavir Arya Musafir	アーグラ
11	ブラーフイー	1916	Muḥammad ‘Umar Dīnpūrī	ラーホール

訳し、1850 年にカルカッタから出版した [Khan 1996: 224]。

- 4) ジュズウ juzv は、クルアーンを 30 等分した 1 つの部分を目指す。ジュズウ第 1 開扉章から雌牛章の 141 節までを指し、このように長い章句は途中で分断されることもある。ウルドゥー語ではジュズウを指すペルシア語起源のパーラ pārah がより日常的に使われている。
- 5) タフスィールは対象とするテキストにより、その形式から、通巻的、部分選択的の二区分に分類することができる [小杉 1994: 93]。本稿で取りあげる『クルアーンの理解』は通巻的タフスィールである。

12	マラーティー	1916	Ḥakīm Sūfī Muḥammad Ya'qūb <u>Khān</u>	ボンベイ
13	テルグ	1930	Chilkoori Narayana Rao	マドラス
14	カンナダ	1949	Kesari, R.A.	バンガロール
15	オリヤー	1951	Shaikh Mansur	カタック
16	サラーエキー	1955	Abdut Tawwab	ムルターン
17	シンハラ	1961	Moors' Islamic Cultural Home	コロンボ
18	アッサム	1962	Muḥammad Ṣādir 'Alī	シロン
19	カシュミール	1973	Muḥammad Yūsuf Shāh	スリーナガル
20	ディヴェヒ	1975	Anon.	マーレ
21	ネパール	1982	Gokul Sinha	デリー
22	サンスクリット	1984	Satyadeva Varma	デリー
23	マニプーリー	1991	Ahmad Hasan	ティルフィード、UK

出典：[Khan 2001] をもとに筆者作成。著者名のラテン文字転写は [Khan 2001] に従った。

表2. 南アジア諸言語における印刷された最古の部分選択的タフスィール

	言語名	出版年	著者名	出版地
1	ウルドゥー	1821	Sayyid Ahmad Shahid	カルカッタ
2	ベンガル	1868	Akbar 'Alī <u>Ghulām</u>	カルカッタ
3	パシュトー	1880	Ghulām Muḥammad	ペシャーワル
4	パンジャープ	1885	Nuwan Kutī Shah	ラーホール
5	タミル	1897	Sulaiman bin Muhammad	コロンボ
6	シンディ	1901	Ahmad ibn Karamullah Makhdum Naurangpoto	カラーチー
7	カシュミール	1904	Wā'iz Muḥammad Yahyā	アムリッツァル
8	カンナダ	1929	Siddiq Dindar Chennabasaveswar	バンガロール
9	グジャラート	1934	Abū Muḥammad Muslih	ハイダラーバード
10	アッサム	1940	Ataur Rahman	カルカッタ
11	ヒンディー	1956	Sadaruddin Islahi	ラーンプール
12	マラヤーラム	1958	Anon.	トリヴァンドラム
13	マラーティー	1964	Achyutkumar Despande	パーマル
14	テルグ	1968	Sayyid Nurullah Qadri	クルヌール
15	ブラフイー	1973	Sultān Aḥmad bin Ḥāfīz <u>Khān</u> Muḥammad Ḥāfīz	クエッタ
16	サラーエキー	1986	Dilshad Klancvi	バハールワールプール
17	シンハラ	1995	Anon.	リヤド
18	オリヤー	1998	Dr. Riazul Haq	カタック
19	バルーチ	-	Sayyid Hamsi	n.p.

出典：[Khan 2001] をもとに筆者作成。著者名のラテン文字転写は [Khan 2001] に従った。

この表からは、ウルドゥー語のタフスィールがもっとも古く書かれていたことがわかる。ウルドゥー語以外では、ベンガル語やシンディ語、パシュトー語で比較的早くからタフスィールが執筆されてきた。また、ベンガル語ではアラビア語のタフスィールとして既に刊行されていた書籍を翻訳した著作がみられ、同じようにシンディ語ではワリーウッラーなどのペルシア語のタフスィールを翻訳することも多かったようである。さらに、1900年以降にタフスィールの執筆が開始された諸言語では、アブルカラム・アーザードやマウドゥーディーなどの、ウルドゥー語タフ

スィールの翻訳が複数確認された [İhsanoğlu 1986; Khan 2001]。

次の表は、南アジア諸語で書かれたタフスィールの著者の人数を、言語別にまとめたものである。

表 3. 南アジア諸言語におけるタフスィールの著者数 (単位：人)

	言語名	通巻的	選択的	合計
1	ウルドゥー	199	323	488
2	ベンガル	67	150	217
3	パンジャーブ	13	30	43
4	スィンディー	24	8	32
5	タミル	19	12	31
6	パシュトー	18	12	30
7	ヒンディー	15	3	18
8	グジャラート	11	5	16
9	マラーヤラム	10	6	16
10	テルグ	7	4	11
11	マラーティー	6	2	8
12	アッサム	2	3	5
13	カンナダ	3	2	5
14	ブラーフイー	2	2	4
15	サラエキー	3	1	4
16	カシュミール	1	3	4
17	シンハラ	2	2	4
18	オリヤー	2	1	3
19	バルーチ	1	1	2
20	サンスクリット	1	0	1
21	ディヴェヒ	1	0	1
22	マニプーラー	1	0	1
23	ネパール	1	0	1

出典：[Khan 2001] をもとに筆者作成。

タフスィールの著者数についてもウルドゥー語が突出しており、次いでベンガル語やパンジャーブ語といった比較的ムスリム住人の多い地域の言語が上位にある。

4. 印刷技術の発展とタフスィール

アブドゥルカーデイルの後、南アジアにおけるウルドゥー語によるタフスィールは増加を続けた。その際に重要な役割を果たしたのが、印刷技術の発展と利用であった。南アジアではじめてアラビア文字の印刷技術が導入されたのは 1778 年のことであるが、1829 年にアブドゥルカーデイルのタフスィールが出版された時には、まだアラビア語・ペルシア語にないウルドゥー語固有の文字を印刷する技術は開発されていなかった [Khan 1997: 42]。1840 年頃までに、南アジアの各都市に印刷所が普及し、カルカッタ、ボンベイ、マドラスに次いでデリーやラクナウ、アーグラで出版活動が盛んになり、少し遅れてラーホールが加わった。また、同じ頃に石版印刷の技術が導入され、ウルドゥー語の印刷技術が向上するにつれ、近代主義者や改革主義者らによって、アリーガ

ル・カレッジ設立⁶⁾(1875)に代表される教育啓蒙活動や英語文献のウルドゥー語訳が推進され、多数の出版物が印刷されるようになった[Aqeel 2009]。

この時代の代表的なタフスィールとしては、ナズィール・アフマド、ターナヴィー、アーザードのものなどがあげられる。文学界出身のナズィール・アフマド Deputy Nazīr Aḥmad⁷⁾は、ウルドゥー語で初の長編小説『花嫁の鑑 *Mirat al-'Urūs*』(1869)や『ナスーの後悔 *Taubat al-Naṣūh*』(1877)などの文学作品で知られている。彼は、1883年にデリーに戻った後、息子のイスラーム教育のために *Tarjumān al-Qur'ān* (1899)を記した。また、1867年に設立されたダールルウルム学院 Dār al-'Ulūm を拠点とするデーオバンド派のターナヴィー Ashraf 'Alī Thānavī⁸⁾は、1908年に12巻本の *Bayān al-Qur'ān*⁹⁾を発表した。サル・サイイド・アフマド・ハーン Sir Saiyid Aḥmad Khān¹⁰⁾のアーリーガル運動に異論を唱え、ヒラーファト運動に挺身した宗教・政治指導者アブルカラム・アーザード Abū al-Kalām Āzād¹¹⁾は、1932年にウルドゥー語で *Tarjumān al-Qur'ān* を執筆した。他にも、マウラヴィー・アブドゥルガッフル・ハーン Maulavī 'Abd al-Ghaffūr Khān の *Hadā'iq al-Bayān fī Ma'arīf al-Qur'ān* (1867)や、ムハンマド・アクラム・ハーン Muḥammad Akram Khān のベンガル語のタフスィール *Karagarer Saogat* (1921)、ユースフ・アリー 'Abd Allāh Yūsuf 'Alī の英語のタフスィール *The Holy Qur'an* (1930)などが著名である。

1947年のパキスタン・インド独立後の作家では、ダリヤーバーディーやアフサン・イスラーヒーの名前が知られている。アブドゥルマージド・ダリヤーバーディー 'Abd al-Majīd Daryābādī (1892–1977)は、ハイダラーバードのウスマニア大学に勤めた後、週刊誌や新聞の記者として執筆活動を始めた[Khan 2001: 318]。彼は1952年に *al-Qur'ān al-Hakīm ma'a Tarjamah wa Tafsīr*¹²⁾をウルドゥー語で著した。また、マウドゥーディーと同時代にジャマアアテ・イスラーミーを指導したアミーン・アフサン・イスラーヒー Amīn Aḥsan Iṣlāhī (1903–1997)の、9巻本のタフスィール¹³⁾も有名である。

このように、19世紀後半から20世紀にかけてのタフスィールの流行は、南アジアの知識人と一般大衆双方のイスラームに対する興味関心の拡大の一端として見ることができる[Robinson 2008: 55]。

II. マウドゥーディーとタフスィール

1. マウドゥーディーの生涯

マウドゥーディーのタフスィールを論じるまえに、ここでは彼の生涯について簡単に振り返ってみたい。

サイイド・アブルアーラー・マウドゥーディーは、1903年に南インドのアウランガーバードのチシュティイー教団の家系に生まれた。家庭内ではウルドゥー語が使われ、父から教育を受けて育った。15歳から、兄と共にジャーナリストとして働きつつ、作文法や英語を学んだ[山根

6) ムハンマダン・アングロ・オリエンタル・カレッジの通称。ウルドゥー語を共有するエリート層の子弟を受け入れて、植民地官僚を数多く輩出した。初期の校長はイギリス人。後にアーリーガル・ムスリム大学へ昇格。

7) 1836–1912。ウツタル・プラデーシュ州ビジュノール県レーハル村生まれ。近代ウルドゥー散文の父。アーリーガル運動に賛同していた。

8) 1863–1943。ムスリム女性のための指南書『天国の装身具 *Bihishtī Zewār*』を著した。

9) *Bayān al-Qur'ān*, rev. ed. 1908, Karachi: H.M. Sa'id Company.

10) 1817–1898。近代改革主義者。アーリーガル運動を指導した。

11) 1888–1958。近代改革主義者。マッカ生まれ。母語はベンガル語。代表的な著作に『カリフ問題』『アル・ヒラール』など。

12) *al-Qur'ān al-Hakīm ma'a Tarjamah wa Tafsīr*. 1952, Lahore: Tāj Company.

13) *Tadabbur-i Qur'ān*. 1961, Lahore: Fārān Foundation.

2001: 168]。1921年にデリーに移ってからは、政党ジャミーアトウルウラマーエ・ヒンド Jam‘īyat al-‘Ulamā-e Hind の機関紙『ムスリム Muslim』や『アル・ジャミーアト al-Jam‘īyat』の編集者として活躍し、同時期にアラビア語を学んだ [山根 2001: 170]。1933年にハイダラーバードから、月刊誌『クルアーンのタルジュマーン *Tarjumān al-Qur‘ān*』を創刊し、ムスリム知識層にイスラーム国家確立を呼びかけた¹⁴⁾。1937年に資産家のいとこであったムハンマド・ベークム Muhammad Begum と結婚し [Jackson 2011: 50]、同年からは、ムハンマド・イクバル Muḥammad Iqbāl¹⁵⁾ に誘われ、パンジャブ州パターンコートにあるイスラーム研究機関ダールルイスラーム Dār al-Islām で学術活動に従事した [山根 2001: 167]。

マウドゥーディーは38歳で政党ジャマアテ・イスラミー Jamā‘at-e Islāmī を創設し、自ら政党のアミール amīr (党首) に就任した¹⁶⁾。パキスタンが独立してからは、彼も政党もラーホールへと移り、パキスタン国内での政治活動を本格化させた [Ahmad 1979: 362; 中川 2001: 212]。しかし、アイユーブの近代化政権下では、同政党は活動を禁じられ、マウドゥーディー自身も数度の投獄を経験した。1953年には『カーディヤーニー問題 *Qādiyānī Mas‘alah*』で民衆を扇動したとして、裁判所から死刑判決を受けた (後に判決は棄却)。1968年頃から体調を崩し、1972年にアミールとしての職を辞すとアメリカに渡り、1979年に客死した。

以上のような経歴から、マウドゥーディーはイスラーム思想家・宗教イデオログとしての側面や [Kagaya 1973; ‘Imārah 1986; Osmani 2002; Usama and Noor 2006]、パキスタンにおける世界初のイスラーム政党の党首・政治家としての側面から評価されてきた [Ahmad 1970; Nasr 1994; Siddiqi 2006; Aziz 2007]。脚光を浴びた著作として、ジハード論を説いた『イスラームにおけるジハード *al-Jihād fī al-Islām*』(1927)、女性に関する『パルダ *Pardah*』(1939)、イスラーム国家論について書いた『イスラーム国家の第一原理 *Islāmī dastūr kī tadvīn*』(1967) などがあげられる。

2. 『クルアーンの理解』成立の経緯

執筆の着想を得たのは、イスラーム研究機関ダールルイスラームのハルカ Halqah という少数の勉強会に参加している頃であった [Osmani 2002: 1]。具体的に執筆を開始したのは1942年2月 [Maudūdī 2010: vol.1 12] で、政党や講演活動などの合間に執筆をしていた。当時の様子を知るバドリー Badri は、「彼の事務所には、アラビア語、ウルドゥー語、英語の文献がうずたかく積み上がり、彼はその書斎で客人とも面会していた」と記している [Badri 2003: 491]。タフスィールの原稿は、まず月刊誌『クルアーンのタルジュマーン』において章ごとに発表され、その後『クルアーンの理解』として刊行された。次の表は、それぞれの章がいつ雑誌に掲載されたか示すものである。

表4: 月刊誌『クルアーンのタルジュマーン』におけるマウドゥーディーのタフスィール稿発表リスト

	章名	発表号 (年月)		章名	発表号 (年月)		章名	発表号 (年月)
-	序文	1942.2,4	4	女性章	1943.2,4,5	8	戦利品章	1944.11–1945.2
1	開扉章	1942.2	5	食卓章	1943.6–10	9	悔悟章	1945.1,2,9–12
2	雌牛章	1942.2–4,6,9	6	家畜章	1943.9–1944.2	10	ユースス章	1946.1–4
3	イムラン家章	1942.10–1943.1	7	高壁章	1944.5–12	11	フード章	1946.6–7

14) この月刊誌はパキスタン独立後にラーホールに拠点を移し、現在まで継続して発刊されている。ただし、創刊当時はまったく売れず、マウドゥーディーはその売上数に失望していた [Jackson 2011: 48]。

15) 1877–1938。パキスタン建国の詩人。弁護士、政治家、哲学者。1930年の全インド・ムスリム連盟年次大会において議長を務め、議長演説で北西インドのムスリムのための独立した国家の必要性を説いた。

16) ジャマアテ・イスラミーは、マウドゥーディーの著作の印税が主要な収入源であった [Robinson 1993: 248–249; Jackson 2011: 78]。

	章名	発表号 (年月)		章名	発表号 (年月)		章名	発表号 (年月)
12	ユースフ章	1946.8/9,1947.4	47	ムハンマド章	1965.11,12	82	裂ける時章	1971.7
13	雷章	1951.1/2	48	勝利章	1966.1-3	83	計量をごまかす者章	1971.8
14	イブラーヒーム章	1951.3-5	49	部屋章	1965.4-7*	84	割れる時章	1971.8
15	ヒジルの民章	1951.6	50	カーフ章	1966.7,8	85	星座章	1971.9
16	蜜蜂章	1951.7,9	51	撒き散らす風章	1966.9,10	86	夜空の星章	1971.9
17	イスラエルの民章 ¹⁷⁾	1952.6-9	52	山章	1966.11,12	87	至高者章	1971.10
18	洞窟章	1952.10-12	53	星章	1966.12,1967.1,2	88	逃げ場のない日章	1971.10
19	マルヤム章	1953.2-4	54	月章	1967.5	89	暁章	1971.11
20	ターハー章	1953.5/6,1955.5	55	慈悲あまねき者章	1967.6,7	90	町章	1971.12
21	諸預言者章	1955.5	56	来るべき日章	1967.8,9	91	太陽章	1972.1
22	巡礼章	1955.6,7	57	鉄章	1967.9-11	92	夜章	1972.2
23	信徒たち章	1955.8,9	58	抗議する女性章	1967.12,1968.1,2	93	朝章	1972.2
24	光章	1955.10-1956.4	59	集合章	1968.2-5	94	胸を広げた章	1972.3
25	識別章	1956.5-7	60	試問される女性章	1968.6,7	95	無花果章	1972.3
26	詩人たち章	1958.7-12	61	戦列章	1968.8,9	96	凝血章	1972.4
27	蟻章	1959.7-10	62	金曜礼拝章	1968.10,11	97	定命章	1972.4
28	物語章	1959.11,12,1960.1,6,7	63	偽善者章	1969.3	98	明証章	-*
29	蜘蛛章	1960.8-10	64	騙し合い章	1969.5,6	99	地震章	1972.5
30	ルーム章	1960.11-1961.1	65	離婚章	1969.9-11	100	疾駆する馬章	1972.6
31	ルクマーン章	1961.3*	66	禁止章	1969.11-1970.2	101	戦慄の日章	1972.6
32	サジュダ章	1961.7,8	67	大権章	1970.1,2	102	多寡の争い章	1972.7
33	部族連合章	1961.10-1962.5	68	筆章	1970.3	103	夕刻章	1972.7
34	サバア章	1962.5,7-9	69	真実の日章	1970.4	104	中傷者章	1972.8
35	創造主章	1962.10, 11	70	天の階段章	1970.4,5	105	象章	1972.8,9
36	ヤースィーン章	1962.12-1963.3	71	ヌーフ章	1970.6	106	クライシュ族章	1972.9
37	整列者章	1963.4-8	72	ジン章	1970.6	107	慈善章	1972.10
38	サード章	1963.8-11	73	衣をかぶる者章	1970.7	108	豊潤章	1972.10,11
39	集団章	1963.12,1964.6,7	74	衣にくるまる者章	1970.8,9	109	不信者たち章	1972.11,12
40	信仰者章	1964.7-10	75	復活章	1970.9,10	110	援助章	1972.12,1973.1
41	解明章	1964.10-1965.1	76	時章	1970.11,12	111	炎章	1973.1
42	シューラー章	1965.1-4	77	送られるもの章	1971.1	112	純正章	1973.2
43	裝飾章	1965.4-6	78	知らせ章	1971.1	-	アル・ムアッウイザティン	1973.3, 4
44	煙章	1965.6,7	79	引き離す者章	1971.2,3	113	梁明章	1973.4
45	跪く章	1965.8,9	80	眉をひそめた章	1971.3	114	人びと章	1973.5
46	砂丘章	1965.9-11	81	包み隠し章	1971.7	-	終章	1973.5

〔Zubair 1985: 13-18〕をもとに筆者作成 (*は要検証)

この表の示す通り、1942年2月号を皮切りに、ほぼ毎月、最初の章から順に発表していたことがわかる〔Zubair 1985: 13-18〕。また、1948年から1950年の投獄されていた期間は、発表が空いていることなども確認できる。さらに、「1968年に体調を崩してから、『クルアーンの理解』最終巻を出版できるかどうかを気にかけながら執筆していた」〔Badri 2003: 491〕という証言は、60年代後半から発表ペースが上がっていることで裏付けられる。

3. 『クルアーンの理解』の出版

家畜章が『クルアーンのタルジュマーン』1943年9月号から翌年2月号にかけて発表され、その7年後の1951年、開扉章から家畜章までを集録した『クルアーンの理解』第1巻が刊行された。第1巻刊行前、マウドゥーディーはムルターンの刑務所に収監されていた。このことは『クルアーン

17) 別名、夜の旅章 al-Isrā' [小杉 2002: 341]。111章の場合、タバリーやシャウキー・ダイフは「棕櫚章」、シャー・ワリーウッラーは「滅びよ章」、アブドゥルカーディル・ワリーウッラー、アブルカラーム・アーザード、アフサン・イスラーヒー、マウドゥーディーは「炎章」としている。

ンの理解』第1巻の前書きで触れられており、「運良くというか運悪くというべきか、私は1948年8月に治安維持法 Public Security Act によって突然逮捕され、刑務所に入れられた。ここでは私に余暇がもたらされ、この本を印刷にまわすに値するところまで手を入れることができた……アブラーラー、ムルターン中央刑務所 Multan Central Jail、ムルターン、1368年ズー・アル＝カアダ月17日／1949年9月11日」と述べている [Maudūdī 2010: vol.1 12]。

1951年、初版が Maktabah-e Ta‘amīr-e Insāniyat 社、発行人 Shaikh Muḥammad Qamar al-Dīn の名で発刊された¹⁸⁾。1967年の第6刷からはオフセット印刷が始まった。1971年の5巻からは出版社が Idārah-e Tarjumān al-Qur’ān 社に替り、1-4巻の増刷も1982年頃より同社に切り替わっている [Hāshimī 1999: 633-638]。

最終章は1972年6月7日、ズフルの礼拝の時刻に完成した [Khan 2001: 314]。6月30日にジャマーアテ・イスラミーが完成記念式をラーホールで開催し、11月5日にはカラーチーで出版記念式典が開かれた [Khan 2001: 314]。

『クルアーンの理解』は全6巻本で総計4,238ページ、マッカやマディーナを記した32の地図、12の図解が含まれている。各巻のページ数や内容については、次のとおりである。

表5：『クルアーンの理解』の章構成

巻	発行年	ページ数	初版発行部数	出版社	内容（章）
1	1951	663	5,000	Maktabah-e Ta‘amīr-e Insāniyat, Lahore	前書き dībācah、序文 muqaddamah、1. 開扉章～6. 家畜章、索引
2	1954	714	3,500	Maktabah-e Ta‘amīr-e Insāniyat, Lahore	7. 高壁章～17. イスラエルの民章、索引
3	1962	821	3,000	Maktabah-e Ta‘amīr-e Insāniyat, Lahore	18. 洞窟章～30. ルーム章、索引
4	1966	684	4,000	Maktabah-e Ta‘amīr-e Insāniyat, Lahore	31. ルクマーン章～46. 砂丘章、索引
5	1971	632	3,000	Idārah-e Tarjumān al-Qur’ān, Lahore	47. ムハンマド章～65. 離婚章、索引、検閲印 ¹⁹⁾
6	1972	659	7,000	Idārah-e Tarjumān al-Qur’ān, Lahore	編者前書き、66. 禁止章～114. 人びと章、索引、検閲印

出典：[Hāshimī 1999: 630-642, Maudūdī 2010]²⁰⁾ などをもとに筆者作成

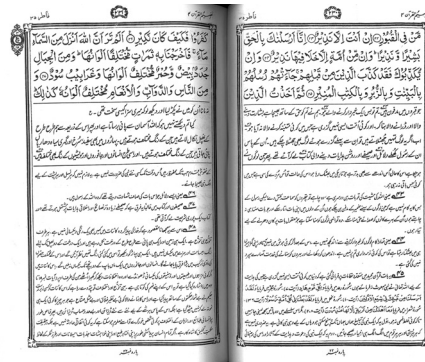
『クルアーンの理解』は、ページの上段部分にクルアーンの章句（アラビア語）、2段目にウルドゥー語の翻訳、3段目にウルドゥー語の注釈が配置されている。一節に対して必ず一つの注釈が付いているわけではなく、必要に応じて複数の注釈が書かれることもある。

18) 装丁本は当時の価格で21ルピー14アーナー、廉価版は4アーナーであった。

19) 巻末に、「証明 taṣdīq: わたしは『クルアーンの理解』第5巻の本文 matn をひと文字ひと文字読んだ。そして、わたしは本文において何の間違いもなく、写しの誤りもないことを証明します。ムハンマド・ラマザーン Muḥammad Ramaẓān（署名）パキスタン政府宗教省登録校正員 Registered Proof Reader」という文言が印刷されている。

20) 2010年5月印刷の第53版は、全巻 Idārah-e Tarjumān al-Qur’ān の発行で、それぞれ第1巻が664ページ、第2巻が712ページ、第3巻が824ページ、第4巻が708ページ、第5巻が675ページ、第6巻が655ページであった。

写真1. 『クルアーンの理解』 創造主章 24 節



出典：[Maudūdī 2010: vol. 4 230–231]

4. 『クルアーンの理解』の発行部数と翻訳状況

『クルアーンの理解』は、ウルドゥー語のタフスィールにおける初のベストセラーと言われている [Mir 1985: 234–235]。第1巻の初版は1951年に発行され、翌1952年には第2刷が刷られ、1973年に10刷、1984年に20刷に達した [Hāshimī 1999: 633]。増刷のペースは巻を増しても衰えることなく、最終巻の6巻は1972年に初版が刷られ、1982年には第10刷に達している²¹⁾。

また、同書はウルドゥー語以外の言語への翻訳も行われている。次の表は、1951年から2000年までの南アジア諸語における『クルアーンの理解』の翻訳数を示す。

表6. 『クルアーンの理解』の南アジア諸語への翻訳数 (単位：冊)

言語名	冊数
ベンガル	13
タミル	6
バシュトー	4
ヒンディー	4
マラヤーラム	3
マラーティー	2
グジャラート	2
シンハラ	2
パンジャブ	2
スィンディー	2
アッサム	1
カンナダ	1
テルゲ	1
オリヤー	1
合計	44

出典：[İhsanoğlu 1986; Khan 2001] をもとに、筆者作成

21) 1951年に第1巻が出版された直後から海賊版が出回ったため、これを防ぐためにマウドゥーディーと出版社が、書籍にナンバリングをし、直筆のサインを入れ [Adams 1988: 307]、注意を呼びかける文言を内扉に入っていた [Hāshimī 1999: 630]。

筆者が2011年9月にパキスタンで確認したところ、現在第53刷 (2010年5月発行) が出来上がっており、第53刷の値段は一冊800円程度で、各巻358,999冊ずつ刷られていた。これは、ラーホールの Idārah-e Tarjūmān al-Qur'ān 社から発行された数であり、前述の Maktabah-e Ta'āmīr-e Insāniyat 社や、要約版、章別になった分割版、海賊版などを含めると、全体の発行部数はさらに多いことになる。

例えば、グジャラート語では、シャイフ・ザヒールッディーン Shaikh Zahir al-Din²²⁾ によって『クルアーンの理解』の翻訳が進められており、1978年にジュズウ第30（至高者章から人びと章）が *Quran Subodh* のタイトルで、アフメダーバードの Islamic Sahitya Prakashan 社から出版された [Khan 2001: 120]。数年後には、サイイド・シャムスルフダー Sayyid Shams al-Huda とムハンマド・アリー・ループチャンド Muhammad Ali Rupchand によってアッサム語への翻訳が開始され、開扉章および雌牛章が1981年に出版されている [Khan 2001: 32]。

また、ジャマーアテ・イスラーミー・ヒンド Jamā‘at-e Islāmī Hind は、『クルアーンの理解』のインド諸語への翻訳に取り組んでいる。1971年には、ヒンディー語で開扉章および雌牛章が出版されたのを皮切りに、その後も合計4種類のヒンディー語の翻訳が出版された [Khan 2001: 128]。さらに、ジャマーアテ・イスラーミー・ヒンドのシャイフ・ハーミドゥッラー・シャリーフ Shaikh Hamid Allah Sharif は、テルグ語の翻訳を手がけ、1978年に知らせ章を、続いて1980年に開扉章および雌牛章を出版した。以降も、章ごとに出版を続け、最終的には1995年にハイダラーバードで全ての章が発表された [Khan 2001: 217]。

南アジア以外では、トルコ語で1986年から88年の間に、全7巻本の翻訳が出版されている²³⁾。また、1956年に『クルアーンのタルジュマーン』で発表された光章が、2年後にアラビア語に翻訳され、ダマスカスから出版された²⁴⁾。光章が『クルアーンの理解』第3巻に収録されるのは1962年になってからのことであり、当時の注目度の高さが伺える。さらに、リヤドからは、1969年にヒジャブに関する章句が、クウェートからは1978年に序章が訳されるなど、同時代的に翻訳されていたことがわかる [Khan 2001: 316–317]。度重なる増刷や他言語への翻訳状況からは、パキスタン国内のみならず、南アジアや他のイスラーム世界においても需要があったことが伺える。

III. マウドゥーディーの執筆意図

次に、マウドゥーディーの『クルアーンの理解』の執筆意図を検討する。ここでは、1949年9月にムルターンの新中央刑務所で書かれた前書きの一部を引用していく [Maudūdī 2010: vol.1 12]。（下線、〔括弧〕内は筆者補足）

『クルアーンの理解』前書き dībācah

聖クルアーン Qur‘ān-e majīd の翻訳 tarjumah やタフスィール tafsīr は、我々の言語 hamārī zabān [ウルドゥー語] において、今日までにこれほど多くの作品 kām ができあがっている。……それゆえに、これまでの翻訳やタフスィールにはなかった〔新しい〕仕事をしなければならない。……もしくは、クルアーンを学ぶ人の希求を埋めるようなものでなければならない。……我々の普通教育を受けた人びと hamāre ‘ām ta‘ālīm yāftah logon の間で、クルアーンの精神 rūh にたどりつかんと欲する…要望が芽生えだしており、日々拡大し続けていることを、私〔マウドゥーディー〕は感じていた……そしてこの渇きを癒すために、私にも何かしらできるのではないかという思いがよぎった。このような感覚が、私を突き動かした。……〔私の〕クルアーンの知識が少しでも役立てば光栄である。

22) この段落のラテン文字転写は [Khan 2001] に従った。次の段落も同様。

23) *Tefhimū'l-Kur‘an : Kur‘an‘ın anlamı ve tefsiri*. ed. Ali Bulaç, trc. Muhammad Han Kayani. 7 vols. İstanbul: İnsan Yayınları. 各巻はそれぞれ 509、550、543、439、511、535、380 ページ。

24) *Tafsīr sūra al-Nūr*. tr. Muḥammad ‘Āshim al-Haddād. Damascus: Dār al-Fikr.

私のこの作品には、ウラマー ‘ulamā’ や研究者 muḥaqqiqen が必要とするものは「書かれてい」ない。また、アラビア語 ‘arabī zabān やイスラームの学問 ‘ulūm-e dīniyah を修めた上で、聖クルアーンの深淵まで探求したい人たちにも向かない。このような人びとの渴望を潤すためには、すでに多くの素材が用意されている。私が奉仕したいと思っているのは、平均的な教育 ausat darje ke ta’alīm を受けた人びとであり、彼らはあまりアラビア語の素養がないため、クルアーン学の幅広い宝庫を利用することが不可能である。私は彼らの要望を考慮に入れた。そのため、従来のタフスィール学において比重が置かれていた多くの解釈論 tafsīrī mubāḥiṣ は、これらの〔一般〕階級 ṭabqe〔の人びと〕には不要であり、私も端から触れもしなかった。そして、私は、ある一般の読者がこの本を読んだ時、クルアーンの意味や目的がするすると明快に bilkul sāf sāf 理解できる〔ような本にする〕ことを目標に定めた [Maudūdī 2010: vol.1 5-6]

……私は、この本で〔従来の〕翻訳 tarjume の方法を捨て、自由な翻訳方法 āzād tarjumānī ka ṭarīqah を選んだ。その理由は、制限された語彙のみで聖クルアーン Qur’ān-e majīd を翻訳 tarjumah することが間違っていると考えるからではなく、すでに優れた翻訳本 tarjumah-e Qur’ān が出尽くしているからである。この道には、もはや新しい〔従来の形の翻訳本を出す〕努力の必要は残っていない。ペルシア語では、ハズラト・シャー・ワリーウッラー先生、ウルドゥー語では、シャー・アブドゥル・カーディル先生、シャー・ラフイーユッディーン先生、マウラーナー・マフムード・ハサン Maulānā Mehmūd al-Ḥasan²⁵⁾ 先生、マウラーナー・アシュラフ・アリー先生、ハーフィズ・ファタハ・ムハンマド・ジャランダリー Maulānā Fateḥ Muḥammad Jālandharī 先生らの翻訳 tarājam が、〔一つのアラビア語に一つの訳語を当てるような直訳的な〕字義通りの翻訳 lafzī tarjumah を求める人びとの要求を満たしている²⁶⁾。しかしながら、これらの字義通りの翻訳では満たされない要求もあり、そのような問題に私は翻訳 tarjumānī を通して取り組んでいきたい [Maudūdī 2010: vol.1 6-7]

……クルアーンはアラビア語でくださった。しかし……多くの語彙が、元来の意味ではなく、特別な意味で使われている。また、同時に、多くの単語が、文脈ごとに異なる意味で使われている。もし、限られた語彙だけで翻訳するならば、この〔クルアーンの〕特別な言語を理解するのは難しいであろう。例えば、クルアーンの中では kufr という語彙は、アラビア語の辞書に載っている意味でもなく、私たちが使う意味とも異なっている。さらに、クルアーンの中でも、すべての箇所ですべて統一された意味で使われているのではない。

……私は、クルアーンの語彙に、ウルドゥー語の外套を着せるのではなく²⁷⁾、クルアーンの叙述を読んで理解したままに、私の心で読んだとおりに、私の言葉〔ウルドゥー語〕に訳そうと思う [Maudūdī 2010: vol.1 10-11]

25) 1851-1920。デーオバンド派のウラマー、独立運動における社会活動家。

26) マウドゥーディーが言及したこれらの先人の名は、『クルアーンの理解』の本文でも度々登場し、引用されている。例えば、集合章 2 節の注釈 2 では、シャー・ワリーウッラーとシャー・アブドゥル・カーディルの著作を比較検討している [Maudūdī 2010: vol.5 381]。

27) アラビア語からウルドゥー語に直訳的な翻訳をするのではなく、の意。

ここでの重要な点は、この『クルアーンの理解』が従来のような知識人を対象とするものではなく、一般大衆の理解を促進するためのものであるということである。彼が言う「普通教育を受けた人びと」や「平均的な教育を受けた人びと」というのは、一般大衆のことを指していると考えられる。彼は、これらの人びとのためのタフスィールを執筆することこそが、『クルアーンの理解』執筆の主要な目的であると表明している。

IV. 『クルアーンの理解』にみられるマウドゥーディーの問題関心

これまで、『クルアーンの理解』の成立や、その執筆意図について述べてきた。ここで本文についても触れ、今後の分析の取り掛かりとしたい。なお、注釈に付いている番号は原文のまま引用し、アラビア語とウルドゥー語は著者が和訳した。

ここではまず、部屋章 13 節の内容を取り上げてみたい。

【49 部屋章: 13 節】

【クルアーンの章句】人びとよ、われ〔アッラー〕は一人の男性 *dhakar* と一人の女性 *'unthā* から汝らを創造し、汝らを諸民族 *sha'b* と諸部族 *qabīla* とにした、汝らが互いに知り合うように。アッラーの御許でもっとも貴き者 *akrama* はもっとも篤信の者 *atqā* である。

【ウルドゥー語訳】人びとよ、われ〔アッラー〕は一人の男 *mard* と一人の女 *'aurat* からおまえを生み出した。それからおまえたちの諸民族 *qaum*²⁸⁾ や諸血縁集団 *birādārī* を作ろう、おまえたちがお互いを知り合うように。本当に、アッラーの近くにあり、おまえたちのうちで最も尊敬される者 *'izzat wālā* は、内面で最も神を畏れる *par heizgār* 者だ。

【注釈 28】……ユダヤ教徒は、イスラエルの民を神に選ばれた創造物だと広めた。そして、彼らの宗教の支配を、イスラエル人でない者にまで押し付け、イスラエル人以外を自分たちより低いものとみなした。同じような差別が、ヒンドゥー教徒の間ではヴァルナ *varnāsharma*〔階級制度〕を生み出した。バラモン *brahman* の優越性が確立されると、上位のカースト *zāt* と比較して、すべての人間は下位〔カースト〕か不浄

28) アラビア語の *sha'b* (人民、国民、民族) と *qabīla* (部族) という単語はウルドゥー語でも使用されているが、マウドゥーディーはより一般的な *qaum* (民族、国家、部族) と *birādārī* (血縁集団) を充てている。ウルドゥー語の *qaum* には、部族、(watan を基礎とするより、宗教や血縁に基づく) 民族、国民 *nation*、(ヒンドゥーとムスリムの) 宗教別コミュニティ、帰属集団の意が含まれる [加賀谷 2005: 1057]。

この *qaum* という概念をめぐるのは、当時二民族論 *Do qaumī nazariya* が提唱され、まさにパキスタン独立に向けての機運が高まっているところであった。マウドゥーディーは自身の論稿の中で、民族 *qaum* と団体 *jamā'at*、パーティー *party*、党派 *hizb* の差異を示した上で、ムスリムと民族とを同一視する論調に反対した [中川 2001: 213]。

また、『クルアーンの理解』の別の章句では、*qaum* を、アラビア語のウンマ *umma* に対応させる語として使っている箇所もある。例えば、蜜蜂章 63 節の「アッラー *allāhu* にかけて、われ〔アッラー〕は汝以前の諸ウンマ *umma* にも〔使徒を〕遣わした」というアラビア語対して、ウルドゥー語訳では「神 *khudā* に誓って、おおムハンマドよ、おまえより前のいくつもの民族 *qaum* に、われは預言者を遣わした」としている [Maudūdī 2010: vol.2 549]。さらに、イムラーン家章 110 節では、アラビア語のウンマ *umma* に対し集団 *garoh* という単語を充てている。別の著者のタフスィールを見ると、ラフィーウッディーンは、イムラーン家章 110 節と蜜蜂章 63 節の両方にウルドゥー語のウンマ *ummat* の語を充てている [Raḥī' al-Dīn 2009?: 81, 354]。アブドゥルカーデイルは、前者に宗派 *firqah* の語を充て、後者はウンマと訳している [ʿAbd al-Qādir 2009?: 81, 354]。アーザードは、どちらの章句にもウンマを充てている [ʿAzād 2008: 97, 375]。マウドゥーディーと最も近い時代に翻訳をしたイスラーヒーは、前者をウンマ、後者を *qaum* と訳した [Islāhī 2009: 158, 2009?: 420]。このように、一つのアラビア語に対してどのような訳語を充てているのかは、今後の課題として丹念に調べていく必要がある。

nā pāk と決められ、〔ヴァルナの最下位である隷属民〕 シュードラ shūdra を究極に不名誉 zillat の深淵に落とし込んだ。黒人、白人の区別は、アフリカやアメリカにおいて、有色人種の人びとに残虐行為を行ってきた。これは遠い歴史の話ではなく、今、20世紀においてもすべての人びとの目の前で起こっていることである。ヨーロッパ人が、アメリカ大陸において〔アメリカ先住民〕 インディアンという人種に対して、また、アジアとアフリカにおける虚弱な国々 qaum に対して、〔植民地〕 支配 tasalluṭ を敷いたのも、同じ〔差別意識に基づいた〕 対応であった。自分の故郷 waṭan、国 qaum の境界 ḥudūd の外で生まれた人たちの生命、財産、名誉〔を奪うこと〕 が合法 mubūḥis であり、それを奪うのも、奴隷にするのも、この世から抹殺するのも彼ら〔ヨーロッパ人〕 の権利であると思っていた…… [Maudūdī 2010: vol.5 95-96]

マウドゥーディーがこの章を執筆した1960年代前半は、アジアやアフリカ各地で民族自決の機運が高まっている時であった。マウドゥーディー自身、20代の多感な時期をイギリス植民地への独立闘争の中で過ごしている。この節に対する注釈では、イスラエル人やヒンドゥー教徒²⁹⁾ の階級制度、西洋列強の帝国主義に対する反発が読み取れる。

次に、金曜礼拝と公休日に関する節をみる。

【62 金曜礼拝章: 10 節】

【クルアーンの章句】 礼拝 ṣalā が済んだならば、汝らは大地 arḍ に散り、アッラーの恩恵を求め、アッラーを多く唱えよ。そうすればきっと汝らは栄えるであろう。

【ウルドゥー語訳】 礼拝 namāz が満たされたならば、大地 zamīn に散りなさい。そして、アッラーの恵を求めなさい。アッラーをできるだけ思い出しなさい。そうすれば、おまえには繁栄が訪れるでしょう。

【注釈 16】 クルアーンでは、ユダヤ教やクリスチアンの啓典のように、金曜が休みと決まっているわけではない。しかし、金曜がムスリムのコミュニティにとって、重要なシンボルであることは、誰も疑いがないだろう。ちょうど、土曜と日曜が、ユダヤ教とクリスチアンのそれぞれのコミュニティのシンボルであるように。……クリスチアンは、キリスト教徒がほんの僅かにしか居ない〔支配下に治めた〕 他国 mulk においてさえも、日曜を休日として押し付けることにためらいがない。……分離独立前のインド hindustān において、英領インドとムスリム国家 musalmān riyāsat³⁰⁾ では、国の一部では日曜が休み、他方では金曜が休みという違いがあった。しかし、ムスリムの内面に、イスラームの善 ḥusn が欠けている場合、自分の手の内に〔休日を自由に制定する〕 選択権が入っても、〔金曜ではなく〕 日曜を選んでしまうのだ。私たちのパキスタンで〔日曜を公休日と制定することが〕 起こったように³¹⁾。過度の西洋化

29) この節を含め、本書ではヒンドゥー教徒やヒンドゥー教の制度などについて10カ所以上で言及している。

30) ムスリムの藩王が統治する藩王国。植民地時代においても、イギリスと協定を結ぶなど、協力関係にありながら独立を保っていた。

31) パキスタンの公休日は何度か変更されている。本書の出版された6年後の1977年には、金曜日が休日と制定された。現在は日曜日が休日である。

が進むと、ムスタファ・ケマルのトルコのように、わざわざ金曜から変えてまで日曜を選択してしまうのだ [Maudūdī 2010: vol.5 297–298]

この節は、礼拝の後に各々の商売に戻りなさいという啓示であり、ムスリムにとっての金曜日が、一日仕事を休むユダヤ教徒やキリスト教徒の安息日とは性質の異なることを示している。この注釈は、当時急激に西洋化が進んでいたパキスタン社会に対するマウドゥーディーの非難が込められていると見る事が可能である。以上のように、マウドゥーディーの解釈には、彼を取り巻く社会背景を反映した箇所が見受けられる。

V. まとめ

本稿は、サイイド・アブルアラー・マウドゥーディーの『クルアーンの理解 *Tafhīm al-Qur'ān*』の、南アジアにおける位置づけについてみてきた。最後に、これまでの考察をまとめたうえで、今後の展望について示していきたい。

南アジアにおけるタフスィールの伝統は、19世紀以降に急速に発展してきた。その背景には、印刷技術の発展というインフラ整備の他に、イスラーム改革主義らの主導するタフスィールの流行があったことを確認してきた。その上で、マウドゥーディーは、より一般大衆に寄り添ったタフスィールの必要性を唱え、高等教育を受けていない人びとが理解可能な、平易で簡潔なウルドゥー語で解説することを試みた。これは彼が思想活動だけでなく、政治家やイデオログとしての活動とも密接に関わってきたことと関係しているのではなかろうか。また、若干の例ではあったが、『クルアーンの理解』の本文からは、マウドゥーディーが現代的・社会的な問題関心をタフスィールに反映していると考えられる箇所が確認された。

以上の見解を踏まえたうえで、最後に今後の展望について記してみたい。マウドゥーディーは、まず『クルアーンのタルジュマーン』を通して論稿を発表し、その後単行本『クルアーンの理解』の形に編纂・出版してきた。そこで今後は、30年と4ヵ月という長い年月をかけて出版していたことに着目する必要がある。マウドゥーディーが執筆を始めた1942年には、独立運動の機運が激しくなっており、ムスリムの処遇をめぐる議論が飛び交っていた。その後、パキスタンの建国、近代主義政権における投獄、バングラデシュの独立などを経て、最終巻が刊行されている。このように、『クルアーンの理解』のなかで、時代を追うごとにどのような主張の変化が見られるのか、当時のパキスタンの社会情勢や、ジャマアアテ・イスラーミーの変遷などと照らし合わせながら明らかにすることを今後の展望としたい。

参考文献

[和文文献]

加賀谷寛 1964 「近代イスラームのコーラン解釈」『オリエント』7(3/4), pp. 79–93.

—— 2005 『ウルドゥー語辞典』大学書林.

小杉泰 1994 「イスラームにおける啓典解釈学の分類区分——タフスィール研究序説」『東洋学報』76(1/2), pp. 85–111.

—— 2002 「クルアーン」大塚和夫ほか（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店, pp. 338–344.

- 長岡慎介 2011 『現代イスラーム金融論』 名古屋大学出版会.
- 中川康 2001 「サイイド・アブール・アラー・マウドゥーディー著『イスラーム的民族性の真意』(翻訳および解題)」『アジア太平洋論叢』 11, pp.211-229.
- 山根聡 1994 「20世紀初期ラーホールにおけるウルドゥー文学の出版状況(1)」『印度学仏教学研究』 42(2), pp. 1009-1007.
- 2001 「マウドゥーディーと『ダールル・イスラーム Dar al-Islam』のイスラーム復興構想——20世紀インド・ムスリム知識人の動態的研究」『アジア太平洋論叢』 11, pp.167-210.
- 2002 「マウドゥーディー」大塚和夫ほか(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, pp.904.

[欧文・アラビア語文献]

- Adams, Charles J. 1966. "The Ideology of Mawlana Mawdud," in Donald E. Smith ed., *South Asian Politics and Religion*, Princeton: University Press, pp. 371-397.
- . 1988. "Abū'l-A'la Mawdūdī's Tafhīm al-Qur'ān," in Andrew Rippin ed., *Approaches to the History of the Interpretation of the Qur'an*, Oxford: Clarendon Press, pp. 307-323.
- Ahmad, Aziz. 1970. "A Bibliographical Survey," in Aziz Ahmad and G.E. von Grunebaum eds., *Muslim self-statement in India and Pakistan, 1857-1968*, Wiesbaden: O. Harrassowitz, pp. 1-24.
- Ahmad, Khurshid and Zafar Ishaq Ansari. 1979. "Mawlānā Sayyid Abul A'la Mawdūdī: An Introduction to His Vision of Islam and Islamic Revival," in Khurshid Ahmad and Zafar Ishaq Ansari eds., *Islamic Perspectives: Studies in Honour of Mawlānā Sayyid Abul A'la Mawdūdī*, London: The Islamic Foundation, pp. 359-383.
- Ahmad, Sayed Riaz. 1976. *Mawlana Mawdūdī and the Islamic State*. Lahore: People's Pub. House.
- Aqeel, Moinuddin. 2009. "Islamic Moderate Trends in South Asia: Commencement of Printing in the Muslim World: A View of Impact on Ulama at Early Phase of Islamic Moderate Trends," *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 2(2), pp. 10-21.
- Aziz, Khursheed Kamal. 2007. *Party politics in Pakistan, 1947-1958*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (c1976)
- Badri, Malik B. 2003. "A Tribute to Mawlana Mawdudi from an Autobiographical Point of View," *Muslim World* 93(3/4), pp. 487-502.
- Chapra, M. Umer. 2004. "Mawlana Mawdudi's Contribution to Islamic Economics," *Muslim World* 94(2), pp. 163-180.
- Hassan, M. Kamal. 2003. "The Influence of Mawdudi's Thought on Muslims in Southeast Asia: A Brief Survey," *Muslim World* 93(3/4), pp. 429-465.
- İhsanoğlu, Ekmeleddin. 1986. *World bibliography of translations of the meanings of the Holy Qur'an: printed translations, 1515-1980*. Istanbul: Research Centre for Islamic History, Art and Culture.
- ‘Imārah, Muḥammad. 1986. *Abū al-A'la al-Mawdūdī wa al-ṣaḥwa al-Islāmīya*. Bayrūt, Lubnān: Dār al-Waḥda. (in Arabic)
- Jackson, Roy. 2011. *Mawlana Mawdudi and Political Islam: Authority and the Islamic State*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Kagaya, Hiroshi. 1973. "A Chronology of Modern Urdu Literature: 1800-to date," *Indian and Pakistan*

- Department of Foreign Language* 29, pp. 165–177.
- Khalidi, Omar. 2003. “Mawlana Mawdudi and the Future Political Order in British India,” *Muslim World* 93(1), pp. 415–427.
- Khan, Mofakhkhar Hussain. 1993. “Bibliographic Control of Qur’anic Literature: An Evaluation Survey,” *Islamic Quarterly* 37(2), pp. 95–123.
- . 1996. “An Early History of Urdu Translations of the Holly Qur’an: A Bio-bibliographic Study,” *Islamic Quarterly* 40(4), pp. 211–234.
- . 1997. “An Early History of Urdu Translations of the Holly Qur’an: A Bio-bibliographic Study,” *Islamic Quarterly* 41(1), pp. 34–51.
- . 2001. *The Holy Qur’ān in South Asia: a Bio-Bibliographic Study of Translations of the Holy Qur’ān in 23 South Asian languages*. Dhaka: Bibi Akhtar Prakaashani.
- Malik, Hafeez. 1988. *Sir Sayyid Ahmad Khan and Muslim Modernization in India and Pakistan*. New York: Columbia University Press (Studies in oriental culture; no. 15), (c1980).
- McDonough, Sheila. 1984. *Muslim Ethics and Modernity: a Comparative Study of the Ethical Thought of Sayyid Ahmad Khan and Mawlana Mawdudi*. Waterloo: Wilfrid Laurier University Press.
- Mir, Mustansir. 1985. “Some Features of Mawdudi’s Tafhīm al-Qur’ān,” *American journals of Islam Social Sciences* 2(2), pp. 233–244.
- Moten, Abdul Rashid. 2003. “Mawdudi and the Transformation of Jama’at-e-Islami in Pakistan,” *Muslim World* 93(3/4) pp. 391–414.
- Nasr, Seyyed Vali Reza. 1994. “Mawdudi and Jama’at-i Islami: origins, theory and practice of Islamic revivalism,” in Ali Rahnama ed., *Pioneers of Islamic Revival*, London: Zed Books Ltd, pp. 98–124.
- . 1996. *Mawdudi and the Making of Islamic Revivalism*. Oxford: University Press.
- Osman, Fathi. 2003. “Mawdudi’s Contribution to the Development of Modern Islamic Thinking in the Arabic-Speaking World,” *Muslim World* 93(3/4), pp. 465–486.
- Osmani, Noor Mohammad. 2002. *Mawdūsi’s Tafhīm Al-Qur’ān and Islamic Da’wah: A Methodological Study*. International Islamic University, Malaysia. (Ph.D Thesis)
- Robinson, Francis. 1993. “Technology and Religious Change: Islam and the Impact of Print,” *Modern Asian Studies* 27, pp. 229–251.
- . 2008. *Islam, South Asia, and the West*. New Delhi, New York: Oxford University Press. (c2007)
- Ushama, Thameem and Noor Mohammad Osmani. 2006. “Sayyid Mawdudi’s Contribution Towards Islamic Revivalism,” *Annual Research Journal of the International Islamic University Chittagong* 3, pp. 93–104.

[ウルドゥー語文献]

- ‘Abd al-Qādir, Maulānā Shāh. 2009?. *Qur’ān-e mazīd*. Lahore: Pāk Kampanī.
- Aḥmad, Imtiyāz. 2007. *Maulānā ki naṣr nigārī*. Lahore: Idārah-e Ma‘ārif-e Islāmī Lāhor.
- Aḥmad, Ifīkhār. 2001. *Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī*. Faisalabad: Al-Mezān Pabliishsharz.
- Akhtar, Safīr. 1998. *Bayād-e Maudūdī*. Lohsar Sharfo: Dār al-Ma‘ārif.
- . 2008. *Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī aur un ka sarmā‘yah qalam*. Lohsar Sharfo: Dār al-Ma‘ārif.
- Āzad, Abū al-Kalām. 2008. *Tarjumān al-Qur’ān*. Karachi: Hikmat-e Qur’ān Inṣṭīṭiyūt.
- Hāshimī, Rafī‘ al-Dīn. 1999. *Tasānīf-e Maudūdī*. Lahore: Idārah Ma‘ārif-e Islāmī.

- Iṣlāhī, Amīn Aḥsan. 2009. *Tadabbur-i Qur'ān*, Vol. 2. Lahore: Fārān Fā'ūnḍīshan.
- . 2009?. *Tadabbur-i Qur'ān*, Vol. 4. Lahore: Fārān Fā'ūnḍīshan.
- Maudūdī, Saiyid Abū al-A'la. 2010. *Tafhīm al-Qur'ān*, 6 vols., Lahore: Idārah-yi Tarjumān al-Qur'ān.
- Manṣūr, Firoz al-Dīn. 1979. *Maulānā Maudūdī ke taṣā'urāt*. Lahore: Peoples Publishing House.
- Raḥī' al-Dīn, Maulānā Shāh. 2009?. *Al-Qur'ān al-karīm*. Lahore: Pāk Kampanī.
- Siddīqī, Na'im. 2006. *Al-Maudūdī*. Lahore: Al-Faiṣad. (c.1963)
- Zubair, Hakīm La'aim al-Dīn. 1985. *Ishār-e māhnāmeh tarjumān-e al-Qur'ān*. Karachi: Idārah-e Ma'arif-e Islāmī Karācī.